

# 遺伝子検査の



田

# でたらめ鑑定横行

「同じ遺伝子を検査しているのに、どうして結果が違ふんですか」

2010年、東京都内の会社経営の男性は、中国・上海にある遺伝子検査会社の巨大な施設を訪れ、中国人幹部に2通の鑑定書を示して問いただした。施設内には多数の検査器具が並び、従業員が動き回っていた。

鑑定書は、男性自身が口の中の粘膜を2回に分けてこの会社に送り、依頼したものだ。信頼性を確かめるため、うち1回は親戚の名前で送っていた。その頃、同社は「遺伝子で潜在的な才能が99%わかる」と宣伝し、日本でもテレビ番組などで紹介されて人気を集めていた。男性は同社の日本代理店として、仕入れた検査キットを1個約6万円で販売しており、鑑定に問題がないか気がなっていたという。

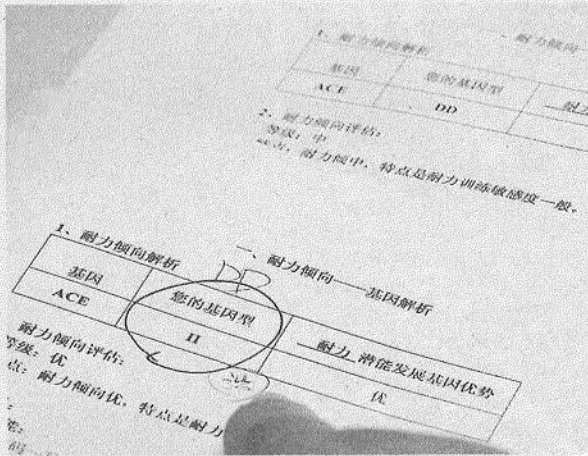
結果を見ると、遺伝子18個の型は2通で全て一致するはずなのに、2個は一致しなかった。妻も同様の方法で2通依頼したが、やはり2個が不一致だった。

幹部は「もう一度検査する」と取り繕うだけ。男性は「誤差の範囲内だ」と割り切り、13年に事業から撤退するまで販売を続けた。「いいかげんなものを売ってしまった。反省している」

\*

上海の会社が鑑定するとしていたのは「学習・知能」「音楽」「絵画」「運動」「ダンス」「EQ(心の知能指数)」の6項目だ。

12年度の経済産業省の調査で確認された遺伝子検査業者87社のうち、同社の代理店は19社を占めた。このうち11社はすでに代理店をやめ、4社は法人登記がないことが取材で判明。残る4社は取材を拒否したか、



同じ人物の検体について、中国・上海の検査会社が作成した2通の鑑定書。持久力に関連するとされる遺伝子が、手前では「II」だったが、奥は「DD」と記されている

回答がなかった。13年頃まで代理店を営んでいた関西の業者の担当者には、「どの顧客の検査結果も似ているので上海側に問い合わせたが、『日本人の傾向』としか答えなかった」と話す。関東の代理店の経営者は、「新手的な占いだと思ってキットを売っていた」と言い切った。

林崎良英・理化学研究所プログラムディレクターは、同社の鑑定について「難聴や色覚障害に関する遺伝子を見て、本来この遺伝子からは分からない音楽や絵画の潜在能力を判定するなど、結果によっては子供の将来への影響が大きい項目が含まれている」と問題視する。

同社の事業は現在、中国の別会社が継承している。所在地を上海市郊外のビルの一室に移したとしているが、ロビーに表示されている社名は異なる。責任者だという男性は今月、取材に対し、「遺伝子検査は子供の教育と発達のために価値がある」「(鑑定の誤りは)ごくまれに発生するが、無料で再検査を行っている」などと説明した。日本向けのビジネスについては、「これまで2000人以上検査したが、新規開拓はできていない。検体は3か月保存した後、廃棄している」とした。

## 業者「新手的な占い」キット販売

遺伝子検査ビジネスの「品質」には多くの医学会や専門家から懸念が示されている。昨年5月、日本医師会の生命倫理懇談会は「『一般の人に比べて(病気のリスクが)何倍』などという単純な報告では誤解を生みかねない。国民が安心して生命科学技術の恩恵を受けられる体制作りが急務だ」との声明を出した。実害の恐れもある。家庭裁判所の関係者は「精度の低い鑑定結果が、親子関係を巡る調停に証拠提出される例もある」と明かす。裁判所から依頼された鑑定を多く手がける「法科学鑑定研究所」(東京都新宿区)の幹部は昨夏、ある検査業者が行った父子鑑定の結果について依頼者の男性から意見を求められた。A4用紙に記された結果は、実の父子である確率を「51・9917%」としていた。幹部は「現在の技術水準なら、100%か0%のほぼ二者択一。でたらめな検査だ」と話す。この業者に男性が問い合わせても、回答はなかったという。

\*